

十津川警部 鳴子こけし殺人事件

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	名物こけしが五本	7
第二章	こけしが泣いて二人目が死んだ	45
第三章	第三の殺人	70
第四章	四人目の犠牲	95
第五章	三年前八月二十五日、雨	122
第六章	京都に追う	151
第七章	「大願成就」か毘か	181

十津川警部 鳴子こけし殺人事件

第一章 名物こけしが五本

1

東京の千代田区にあるホテルKには、一泊百万円というスイートルームがある。外国の要人が、時々利用する部屋だが、五月十日のこの日に、泊まったのは、日本人だった。

その日本人の名前は、大河内敬一郎といった。今年六十歳。IT関連業界にあって、日本のデジタルと呼ばれる会社を一代で築き上げ、巨万の富を得た男である。

五月十日に、大河内が、このスイートルームを、予約したのは、ビジネスのためではない。女のためである。

大河内には、今から半年前に知り合った一人の女がいた。その彼女が突然、一泊百万円の部屋に、泊まってみたいといい出したのである。

そこで、大河内は、五月十日に、その一泊百万円のスイートルームを、予約し、現在、その部屋にいる。

午後十時に、彼女が、お忍びで、このスイートルームを、訪ねてくることになっていた。大河内は、それまでに、部屋を花で飾り立て、ワインを用意しておくことにした。

そこでルームサービスに頼んで、女の好きなバラの花で、部屋という部屋を飾り、最上級のワインを、用意させた。

大河内自身は、九時を過ぎると、バスルームを使い、ナイトガウンに着がえて、約束の十時にやって来るはずの女を、迎えることにしていた。

九時四十分、部屋のベルが鳴った。腕時計を見ながら、

（もう来たのか？ それにしては、少し早いな）

と、大河内は、思ったが、女が、約束よりも早く来たことに、喜びを感じてもいた。

（あいつも、早く会いたいんだ）

勝手に考え、少しばかり薄くなった髪を、丁寧になでつけてから、勇んで、ドアを開けた。

次の瞬間、大河内の顔に、戸惑いと驚きの表情が浮かんだ。

「君はいったい？」

と、いいかけたところで、大河内の声が、消えてしまった。

ドアの向こうにいた人間が、いきなり、隠し持っていたナイフで、大河内の、はだけた胸を刺したからである。

2

警視庁捜査一課の十津川警部は、広い部屋の中を見回した。

五十畳近くはある広い居間の真ん中で、ナイトガウン姿の、六十歳の男が、仰向けに倒れて死んでいるのだ。

テーブルの上には、極上のワインが、氷の入ったバケツトの中で横たわっている。二つのワイングラスが、置いてある。殺された男は、お

そらく、女性とだろうが、この広い部屋で、ワインを楽しもうとしていたに違いない。

「ホトケさんは、ナイフで、二回刺されている。その一つは、肺にまで、達しているようだから、死因は、おそらくショック死だね」

と、検視官が、十津川に、いった。

凶器は、部屋のどこからも、発見されていないから、おそらく、犯人が持ち去ったのだらう。

そのほか、五十畳の部屋は、何千本という真っ赤なバラで、埋め尽くされていた。

（たぶん、ここに来るはずだった女は、バラの花が好きだったんだらう）

十津川は、勝手に想像した。

ホテル側の説明で、殺された男が、日本のデューグルといわれる会社の社長、大河内敬一郎だと、分かった。

十津川をはじめ多くの刑事たちが、この名前を、知っていた。

現在、この日本で、十指に入る資産家だと、多くの新聞や、週刊誌、テレビが、紹介している。そんな男の泊まる部屋として、一泊百万円のスイートルームは、いかにも、相応しく思われたが、しかし、死んでしまったらどうしようもない。死体に相応しい部屋などないだらう。

大河内敬一郎は、三十年前に、結婚していたが、今から五年前、同じ歳の妻は、病死している。二人の間には、娘が一人いるが、その一人娘は、アメリカ人と結婚し、現在、ニューヨークに、住んでいる。

したがって、現在、大河内は、独身なのだから、どんな女性と、どこで会い、何をしても構わないのだが、それでも、この豪華なスイート

ルームで、隠れるようにして女性と会おうとしていたのは、彼女との関係は、おそらく、内密にしておきたかったからだろう。

十津川は、その女性の名前と年齢、住所、そして出来れば、電話番号を知りたいと思った。

十津川は、副社長の一人、それに、大河内の個人秘書に、連絡を取り、すぐに、来てもらうことにした。

二人とも、異口同音に、今日、社長の大河内敬一郎が、このホテルの、スイートルームを予約して、ここに泊まることに、なっていたことは、知らなかったと、いった。

大河内の会社には、副社長が五人いる。その中の一人、小林正雄は、自宅から、急いで、ホテルに、やって来た。

緒方純一という、大河内の個人秘書も同様で

ある。

十津川はまず、二人に、遺体を見てもらってから、

「どうやら、大河内社長は、ここで女性と会うことに、なっていたようですが、彼女がいることは知っていましたか？」

「知っていましたよ。三月頃でしたか、週刊誌に、社長と、その女性のことが、出てしまったんです。実名は、載っていませんでしたが、その時から、私だけではなく、たいいていの社員が、ウチの社長には、若くて、きれいな彼女がいるということを、知っていましたよ」

小林という副社長が、いった。

秘書の緒方もその週刊誌のことは知っていた。「今日、社長が、このホテルのスイートルームを取っていたことは全く知りませんでした」

秘書の緒方がいい、小林も肯いた。

十津川は、二人に対して、大河内社長の遺体は、これから、司法解剖に回されることを告げた。

「何しろ、これは、殺人事件ですからね。ところで、大河内社長には、敵が、多かったですか？」

十津川が、きいた。

とたんに、二人は顔を見合わせ、お互いに牽制しあっていたが、秘書の緒方が、

「この業界は、競争が、かなり激しいですから、ウチの会社のせいで、倒産したと思ひ込んでいる人もいますよ。そんなことで敵は多かったと思いますよ」

と、当りさわりのないいい方をした。

当然、十津川が、聞いても、具体的な名前は、

いかなかった。

死体を、司法解剖に回した後、十津川は、さらに、二人に、話を聞いた。

「先ほど、大河内社長と女性のことが、週刊誌に出たといわれましたが、女性の名前は、出なかったんですね？」

「そうです。名前は、出ていましたが、仮名になっていました」

「そうすると、週刊誌は、女性の本名を、知っているんでしょうか？」

「おそらく、知っているでしょうね」

いったん、小林副社長と、緒方秘書を帰してから、十津川は、改めて、スイートルームの中を、亀井刑事と二人で、見て回った。

血痕は、この部屋のドアの内側、一メートルくらいのところから、点々と、五十畳の居間ま

で、続いていた。

鑑識が、その血痕と指紋を、採取している。

「たぶん、被害者の、大河内敬一郎は、入り口のベルが鳴ったので、女性が来たと思って、何も疑わずに、ドアを開けて、迎えたんだと思いますね」

と、亀井が、いう。

「まあ、そうだろうね」

「ところが、そこにいたのは待っていた女性ではなかった。そこにいた犯人は、ドアの、内側に入り、いきなり、ナイフで社長を刺した。社長のほうは、居間まで逃げて、そこで、倒れて死んだのではないかと、思いますね」

二人は、居間を通して寝室に入った。

ベッドが二つ並んでいる。寝室の隣は、シャワールームに、なっているが、もちろん、シャ

ワールームのほかにバスルームがある。

その時、十津川が、気がついたのは、寝室のテーブルの上に、載っているこけし人形だった。十津川は、そのこけしのことをフロントに聞いてみた。ひょっとして、サービスで、各部屋に、こけしを、置いているのかもしれない、思ったからである。

しかし、そういうサービスは、していないと、フロントは否定した。

だとすれば、殺された大河内敬一郎か、あるいは、大河内を、殺した犯人が、ここに置いたということになる。

鑑識が来て、高さ二十センチくらいのこけしを手に取り指紋を採取していたが、十津川に向かって、

「指紋は、きれいに、拭き取られていますね。」

一つも、残っていませんよ」

と、首をすくめた。

このスイートルームを予約した被害者の大河内敬一郎が、このこけしを、持ってきたとすれば、彼が、わざわざ、自分の指紋を拭き取ったりするわけがない。

そう考えると、このこけしは、犯人が持ってきたものではないのか。

「これは、鳴子なるこのこけしだよ」

と、十津川が、いった。

「鳴子のこけしというと、首を回すと、キュッキュッと鳴るあのこけしですか？」

「そうだ。前に一度、鳴子に行って、こけしの制作過程を、見学したことがあるんだ」

十津川は、手袋をはめた手で、首の部分に、手をかけて、回してみた。

やはり、キュッキュッと、音が鳴る。

「それに、この顔だよ。京都の御所人形の顔になってるんだ」

と、十津川が、いった。

可愛い、女性の顔である。

「もし、このこけしが、犯人が置いていったものだとすると、何かのメッセージでしょうか？」

亀井が、きく。

十津川は、丸い胴体の部分を、ゆっくりと、回してみた。そこに何か、メッセージでも、書いてあるのではないかと、思ったのだが、何の文字も見つからなかった。

しかし、こけしの底を見て、

「メッセージがあったよ」

と、十津川が、いい、そのこけしを、亀井に

渡した。

こけしの底の部分に、黒いマジックで、

〈1〉

という数字が書かれてあった。

「1ですか」

亀井が、つぶやく。

「そうだよ。1だよ。普通に、考えれば、犯人が書いた数字で、一人目を、意味しているんじゃないのかね？」

「このメッセージを示したくて、犯人はわざわざ、このこけしを、持ってきて、殺人の後、寢室のテーブルの上に、置いたんでしょいか？」
「このこけしが、被害者のものでも、ホテルのものでも、なければ、犯人が、置いていったものとしたか、考えようがない」

と、十津川が、いった。

被害者の大河内敬一郎が、この百万円のスイートルームで、会おうとしていた女性は、夜が明けても、名乗り出てくることはなかった。

3

翌日、十津川は、亀井と問題の週刊誌を、出している出版社に向かった。

その週刊誌の編集長に会い、大河内敬一郎と、彼の彼女が、写っている写真が載っているという号を見せてもらった。

夜の街で、望遠レンズを使って撮ったものらしく、いわれてみれば、たしかに、男は、大河内敬一郎だと分かる。

しかし、腕を組んで、歩いている女のほうは、顔がはっきりしない。とつさに、顔を伏せてし

まっているのだ。

「この女性の名前なんか、分かっているんですか？」

十津川が、きくと、編集長が、笑った。

「たぶん、十津川さんも、彼女の写真を、見たことがあるはずですよ」

という。

「それは、つまり、私が、知っているということですか？」

「そうですよ」

大河内の会社の、コマーシャルに出演していた、女性タレントがいた。二十五歳。美人で、頭も切れる。

「その女性タレントが、今年になって、突然、大河内社長の、会社のコマーシャルを辞めてしまつて、別の新人が、出るように、なっていた

んです。それで、何かおかしいと思って、大河内社長のことをマークしていたら、理由が、分かりましたよ。大河内社長が、会社のコマーシャルタレントを自分の彼女に、してしまつたんですよ」

編集長が、その女性の写真を、見せてくれた。たしかに、十津川も、テレビで何回か、見たことのあるタレントだった。

名前は、佐々木恵美、住所は、六本木のマンションに、なっていた。

十津川はすぐ三田村と、北条早苗刑事の二人を、問題の六本木のマンションに急行させた。

昨夜、この女性が、あのホテルのスイートルームを、訪ねることになっていたのではないか？ 十津川は、それを、知りたかったからだ。十津川は、その後で編集長と、カメラマンか

ら、詳しい話を、聞くことにした。

「彼女が住んでいる六本木のマンションですが、たしか、分譲で、一億五千万円だったと聞いています。買ったのは今年の一月、つまり、自分の会社のコマーシャルを、辞めさせて、自分の愛人にした時ですよ」

と、編集長が、いった。

「その後でお宅の週刊誌が大河内社長と、彼女を追いかけるように、なったんですか？」

亀井が、きく。

編集長は、また笑って、

「大河内社長という人は、業界内では、やり手で、通っていますがね、女には甘いんだなど、その落差が面白いなと思って、うちのカメラマンに、狙わせることにしたんですよ」

と、いった。

「大河内社長から、抗議は、なかったんですか？」

十津川が、カメラマンを見た。

「もちろん、顧問弁護士を通して、抗議がありましたよ」

中年のカメラマンが、いい、編集長は、

「訴えるぞと、脅してきましたけどね、すぐに向うから取り下げましたよ。第一、大河内社長は、独身なんだから、逃げ回る必要なんか、どこにもないんですよ」

「大河内社長は、彼女と、結婚するつもりだったんでしょか？」

「さあ、それは、どうですかね。奥さんが、亡くなってから五年も経っていますからね。その間、独身を謳歌していたんじゃないかと、見ているんですよ。いろいろと、ウワサが出ていま

したからね。だから、この女性とも、楽しんで付き合っではいたが、結婚する気は、なかったんじゃないかと、思いますけどね」

「この佐々木恵美という女性は、いったい、どんな、女性なんですかね？ 何でも、かなり、派手な女性だというような記事を、読んだ気がするんですが」

と、十津川が、いった。

「たしかに、以前から、いろいろと派手なウワサのある女性ですよ。ただ、今年に入って、大河内社長の彼女になってからは、大人しくしていたんじゃないですかね？ カメラマンに、六本木のマンションを、張らせたことがあるんですが、社長以外の男が、出入りしたことは、ありませんでしたからね。それだけ、彼女のほうが、現状に満足していたんじゃないかと、想像

しています」

と、編集長が、いった。

4

その頃、三田村刑事と、北条早苗刑事の二人は、六本木のマンションに、佐々木恵美を、訪ねていた。

十代から二十代にかけて人気のカリスマモデルだったというだけに、いかにも、それらしい服装で、二人を迎えた。

顔もかなり、派手である。

「昨夜、都心のホテルの、スイートルームで、大河内社長が、殺されたことはご存じですか？」

と、まず、三田村が、きいた。

「ええ、テレビのニュースで、見たので、知っています」

佐々木恵美が、答える。

「昨夜、そのスイートルームで、あなたが、大河内社長と会うことに、なってたんじゃないですか？」

「ええ、そうです。私が、一度、あのホテルの、スイートルームに泊まってみたいと思ったら、社長さんが、昨日、その部屋を取ってくださいったんです。夜の十時に、行く約束になっていました。でも、急に体の具合が、悪くなってしまった」

「それで、どうしたんですか？」

三田村が相手の顔を見すえた。

「十時になってもよくならないので、大河内社長の携帯に、電話をしました。申し訳ないけれ

ど、行けなくなってしまったと、謝ろうと思つて。でも、いくら鳴らしても、大河内社長が電話に、出ないので、私も、その後の連絡を、止めてしまいました。朝になってテレビで事件のことを知って、驚いてしまいました」

「電話をかけたのが、何時頃だったか、分かりますか？」

早苗が、きいた。

「午後十時、ちょうどだったと、思います」

「連絡をしたのは、その時、一度だけですか？」

「ええ、その時だけです。長く鳴らしていたんですけど、社長さんが、電話に出なくて」

恵美が、繰り返す。

「失礼なことを、お聞きするかもしれませんが」と

と、早苗は、断ってから、

「佐々木さんは最初、あの会社の、コマーシャルに出ていらっしやったんですよね？」

「ええ、そうです」

「それが、今年になってから、辞めてしまわれました。それは、大河内社長さんからの、指示ですか？」

「ええ」

「社長さんに、どんなことを、いわれたのですか？」

「君には、みんなのヒロインではなくて、自分だけの、ヒロインになってほしい。そういわれたんです」

「そのあと、このマンションも、大河内社長が買ってくれたんですね？」

「ええ、そうです」

「大河内社長とは、結婚するつもりでした

か？」

「分かりません。それを、決めるのは、私ではなくて、大河内社長さんのほうですから」

「たしか、週刊誌に、お二人でいるところを、写真に撮られて、記事になったことがありますかね？」

「ええ、三月頃そんなことが、ありました」

「その後、誰かに、脅かされたり、嫌がらせを受けたようなことは、ありませんか？」

早苗が、きくと、恵美は、笑って、

「週刊誌が出た直後は、還暦の社長と付き合うくらいなら、若い俺と付き合えという、嫌がらせの電話が、二、三回ありましたけど、最近は、そんな電話も、なくなりました」

「ところで、佐々木さんは、こけしは、好きですか？」

三田村が、きくと、恵美は、

「えっ？」

という顔になって、

「こけしですか？」

「そうです。最近、こけしを、集める人が増えていると、聞いていますが、佐々木さんもそんな趣味を、お持ちなのではないかと思ひましてね」

「残念ですけど、私、こけしには、あまり興味がありません」

と、恵美が、いった。

「大河内社長は、どうでしょうか？ 社長さんから、こけしを、贈られたことはありませんか？」

「こけしを、贈られたことはありませんし、社長さんが、こけしが、好きだったということも

聞いたことが、ありません」

恵美が、いった。

5

丸の内署に設けられた、捜査本部が、活動を開始した。

最初に報告されたのは、司法解剖の結果だった。被害者の大河内敬一郎は、犯人に鋭利なナイフで、胸を、二回刺されており、そのうちの一回は、肺にまで、達していた。死因は、やはり、そのための、ショック死だという。

事件を最初から考え直すと、十津川たちが、ホテルからの報告を受けて、現場に到着したのは、昨夜の、午後十時三十分である。一泊百万円のスイートルームで、大河内敬一郎が、死体

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。